

地域情報（県別）

【和歌山】大学病院が「美容後遺症相談外来」を開設した理由-朝村真一・和歌山県立医科大学形成外科教授らに聞く◆Vol.1

2021年1月8日（金）配信 m3.com地域版

和歌山県で唯一の特定機能病院として高度な先進医療を提供する県立医科大学附属病院（和歌山市）。時代の変化や社会のニーズに合わせた医療を行うほか、県ドクターヘリコプターを運用し、山間部の多い紀伊半島全域をカバーする救急医療体制を維持している。2020年10月から形成外科が始めた「美容後遺症相談外来」について、形成外科教授の朝村真一氏と外来を担当する美容外科医の白川裕二氏に話を聞いた。（2020年12月2日インタビュー、計2回連載の1回目）

▼第2回は[こちら](#)（近日公開）

——2020年10月から形成外科で自費診療の「美容後遺症相談外来」がスタートしましたが、その経緯を教えてください。

朝村 このタイミングでスタートしたのは、まず美容外科が専門である白川先生が私たちのチームに入ってくれたことが大きなきっかけです。アンチエイジングなどへの意識の高まりで全国的に美容医療へのニーズがある状況ですが、その高まりとともに和歌山県でも施術後のトラブルが増えてきていて、形成の手術をして対応することもありました。

そんな中で、美容医療分野に長けた白川先生がチームメンバーとして活動してくれることになり、課題解決を目指して、この外来を開設しました。美容外科は形成外科の中の一分野ですが、高度な形成外科の技術に加え、美容医療に関する専門的な知識が必要ですから。

白川 私はこの和歌山県立医科大学が母校で、卒業後は和歌山を離れて大阪や秋田で形成外科や美容外科の診療をしてきました。和歌山県出身ではないのですが、「何か和歌山に貢献しなければ」という気持ちが芽生えたこともあって、母校に帰ってきました。



和歌山県立医科大学形成外科教授 朝村真一氏

——どれくらいの受診数がありますか。

朝村 新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響もあるのかまだ少なく、週に1~2人ですね。この外来は院内でも知られていないので、広報誌でお知らせしようとしています。地域の皆さんにもこれから知ってもらう段階なのですが、これまでも美容医療を受けて辛い状況になってしまった患者さんが当科を受診することもありましたし、専門的な外来への潜在的なニーズはあると思っています。

県の消費者センターにも美容医療関係の問い合わせがあるようで、この外来を開設してから「以前に相談があった方を紹介してもいいですか？」という連絡もいただいています。外来の認知度が低くても、関係各所からの紹介などもあって受診してくださる患者さんがいらっやいます。今後認知度が上がればもっと関心を寄せてくださる方は増えると予想しています。

——美容医療のトラブルとは、どのような内容なのか。

白川 和歌山でよく聞くトラブルは、フィラー注入（注射）に関連するものです。ヒアルロン酸を注射してシワを目立たないように浅くしたい、鼻やあごに入れて顔をシャープに、胸を大きく……などの期待感で受ける施術です。ヒアルロン酸はいずれ吸収されてなくなりますが、非吸収性の製剤は効果が長持ちするので注入しているクリニックもあります。そのような吸収されない製剤を注射して残った異物による症状、例えば「顔や胸がカチカチになってしまった。どうしたらいいか」などの内容が多いですね。



美容外科医 白川裕二氏

こういった非吸収性の製剤の注射は、製剤自体は体に安全なものであるということで広まったのですが、そもそも注入することで血管を詰まらせるリスクがありますし、注入した後も体の中で固くなってしまいう危険性があります。注射は手術と違って手軽なので、皮膚科や歯科などさまざまなクリニックで行われてきました。けれど、2、3年前の美容外科学会で、このような非吸収性の注射剤は「使用すべきでない」という提言が出されています。それにも関わらず、未だに使っているクリニックもあります。美容分野は医療の中で質のバラつきがあるのが問題になっているのですが、学会で使用しないよう指定されているものを平然と使うのはかなり気になっています。

ただ、施術を受ける方からすると「1回の効果が長持ちする」もののほうがいいですね。コストパフォーマンス的に考えると、でも、その長持ちする効果というのは製剤が体内で吸収されていない、溶けていないという証拠です。体に吸収されないものを大量に入れるわけですから、その後は問題が多発します。その部位がカチカチになるなどが代表的です。私たちもその危険性をもっと伝えていかなければならないんです。

そのような施術を受けてしまい困っている方々に対して、これまでも切除手術などを行ってきました。でも、なかなかトラブルが減らないんですね。トラブルがあるという前提で動くのも、何となくやるせない気持ちになってしまっていて。少しでもトラブルを減らすことができればとの願いが、この「美容後遺症相談外来」の名前に込められています。

美容医療は後遺症もあるということ、美しさを求めて施術したにも関わらず、かえって醜くなったり、再度施術を受けなければならなくなったりとリスクがあるということを伝えたいからこの名前になりました。そして、もう後遺症が出てしまっていて生きづらくなっている人も解消する術はある、ということを知ってもらえたらと思っています。

——悩みを大学病院で相談できるというのは心強いですね。

白川 本当はその悩みが生み出されないのが一番ですけどね。それに、相談という言葉も難しくて。私たちの外来の受診には、現時点で1回につき8760円（30分まで、税込）がかかります。美容の分野は「無料カウンセリング」という言葉が一般的になってしまっていて、「無料のところもあるのに、なぜここでは相談に費用負担があるのか」と思われてしまうことも考えられます。でも、お金をいただくから偏りのない答えを責任持って出せるんです。

公立の病院ですから、美容面の悩みを相談されたからといって必要以上の診療はしませんので、高額な治療費がかかってしまうということもありません。そういった面も説明したり、納得いただいたりしないといけないので大変ですが、安心して受診してもらえるよう使命感を持って対応していきたいと思います。

朝村 「大学病院で美容？」と思われることもありますが、美容外科も形成外科に含まれるので、外表の異常を診るのは当然です。

そもそも形成外科自体が「身体の機能を改善し、見た目を美しくする」診療科なんです。どこを縫ったかわからないように縫う、傷跡が目立たないようにする、醜形を治す。例えば、身体の表面のできものである腫瘍やほくろなどを、傷跡が目立たないようにきれいに取ります。

私たちの専門の知識や技術を使って、地域の皆さんのQOLを上げたいという気持ちが根底にあります。その気持ちをベースに、「美容後遺症相談外来」が生まれました。大学病院が掲げる外来名としては少し目立っていますが、私たちにとっては外来の開設やそのネーミングは自然でした。もっとこれから地域の皆さんのトラブルの解消のほか、コンプレックスの解消、機能面の向上で生活がしやすくなるように力を注げたらと思っています。

◆朝村 真一（あさむら・しんいち）氏

和歌山県立医科大学形成外科教授。1995年久留米大学医学部卒業後、近畿大学医学部附属病院診療医を経て、2000年Northeastern Ohio University Colleges of Medicineにて組織工学の基礎研究に従事。2002年近畿大学医学部附属病院講師、2008年近畿大学医学部形成外科准教授。2015年から現職。

◆白川 裕二（しらかわ・ゆうじ）氏

形成外科医・美容外科医和歌山県立医科大学卒業後、大阪大学医学部附属病院にて麻酔科・形成外科、その他関連病院にて臨床業務に従事。和歌山県立医科大学非常勤医師。独立行政法人地域医療推進機構大阪みなと中央病院美容医療センター医師。

【取材・文＝万谷 絵美（株式会社Crop）】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

